

近世節用集の価格

佐
藤
貴
裕

はじめに

辞書研究の第一義的な課題として、言語生活の実態に即した定位ということがある。⁽¹⁾これは、辞書の組織・内容を検討する場合に言われるが、さらに進んで、どのような人が何のために辞書を手にするのか、そもそも容易に手に入ってきたのかといった、より現実的なレベル、あるいは人間の側に近い視点での問いを含んでもいよう。筆者が関心をよせる近世では、識字層と営利出版の拡大をみるので、ことにそう問うてみたいとも思うのである。

このような次第で、近世節用集の使用者とその位相などとともに、価格にも注意を払ってきたが、論を構えるほどには資料は集まらない。また、集まった資料が、学術的な検討にふさわしいかといえば疑問もある。近世の書籍の価格といえば、まず『書籍目録大全』（天和元年）など一連の価格付き書籍目録が思い浮かぶが、野間光辰氏は「本屋仲間の参考資料であって、実際の取引や小売における値段は、実は不定であった」と言う。実際の取引引き値段が不定というのは、新版か再版かで経費が異なり、版元と購買者のあいだに介入する商人の手数料の多寡、遠方の場合は荷造り料・送料の有無等々の異なりも考えられ、さらに、日ごろの付き合いの程度からくる心理的な距離までも価格に織り込まれかねないからであろう。このことは、書籍目録のみならず、他の価格資料にも当てはまることである。

ならば、節用集の価格の調査・検討は、価値のないこと、ないし不可能なことなのだろうか。そうではなからう。前述のように、問うてみたい、あるいは問わなければならない課題である。ならば、まずは、現実的な道をとることが考えられる。実際に調査・検討してみて、当たらずといえども遠からずの線が描ければよしとする立場もありえよう。そしていま一つは、障害の解決をはかることである。問題は「不定」であることで、言い換えれば、一般性・確実性の保証がないということかと思うが、実際の取引引き例を大量に集め、特殊性・個別性を可能なかぎり解消する

努力をすればよい。それには、価格関係資料につき、広く御教示方をお願いしなければならない。そのためにも、最低限の礼儀として、現段階で何がどこまで明らかになっているか、もつとも必要な情報はなにか等々を明示すべきであろう。本稿は、そうした目的・意図のもとに記すものである。

一元禄期

近世版本の価格を知ろうとするとき、まずは、元禄前後に開版された価格入り書籍目録が有力な資料となる。ここでも、それらを資料として節用集の価格のあらましを見ておきたい。ただし、書籍目録については、野間光辰氏の指摘のほかに、『書籍目録大全』（元禄九年刊）に「直段は紙の善悪又遠国においては運送の品により相違有なければ一概に定めがたしといへとも大概をしるす」（序）とあるごとく、正確さに限界があることは知らなければならぬ。一方で、現存する節用集に比定することで規模・内容等を確認しつつ、価格のありようを少しでも正確に把握しようと思う。ただし、当時の書籍目録は書名を略記するのが普通なので、現存書への比定の手がかりを増やす意味で、版元名を併記する『書籍目録大全』（元禄九年刊）を主資料とし、適宜、その改修版を参照することとした。

ほぼ確実に現存書に比定できるのは次の七本で、他は割愛した。書籍目録での記述のままに、冊数・書肆・書名・価格の順に示し、ついで現存書の情報を掲げる。

- 七・武村三郎・同（節用集）増補・式夕
↓七冊・武村三郎兵衛・『真草二行節用集』寛文五年刊・題簽「増補大節用集」
- 七・同（武村三郎）・同大增補・六夕
↓七冊・武村三郎兵衛・『増補二行節用集』延宝四年刊・題簽「増補大節用集」

- 十・永田調・同大全・紀州恵空・十三夕
↓七卷（一〇巻）一〇冊・永田長兵衛他・『新刊節用集大全』延宝八年刊
- 十・村上勘・同合類・七夕（価格は宝永三年版目録による）
 - ↓八卷一〇冊・村上勘兵衛・『字林拾葉（合類節用集）』延宝八年刊
 - 八・万や庄・同広益・七夕
↓八卷・万屋庄兵衛・『広益二行節用集』貞享三年刊
 - 六・絵馬や・同綱目・四夕
↓六卷・津田宗智・山本五兵衛・『頭書大益節用集綱目』元禄三年刊⁽²⁾
 - 一・伊丹や太・同和玉入・二夕八分
↓一卷・伊丹屋太郎右衛門他・『大広益節用集』元禄六年刊・『増補和玉篇』合刻

右のように価格が知られるが、諸本間での比較の便のために、美濃判一〇〇丁あたりの価格に換算してみる。『新刊節用集大全』なら美濃判⁽³⁾・全四九〇丁なので、一三夕に四九〇分の一〇〇を乗じ、小数点以下第二位を四捨五入した二・七夕を換算値とする。『合類節用集』なら、四九二丁なので七夕に四九二分の一〇〇を乗じるが、半紙判を美濃判の面積に合わせるため三分の四を乗じた一・九夕を換算値とする。このように単純に紙の量を基準とするだけの簡便なものだが、一応の目安にはなるかと思う。なお、他の本の換算値は、『広益二行節用集』が半紙判・三七五丁で二・五夕、『大広益節用集』が美濃判・一一六丁で二・四夕、『頭書大益節用集綱目』が半紙判・一六一丁で三・三夕、『真草二行節用集』が美濃判・二四一丁で〇・八夕、『増補二行節用集』が中本・三二九丁で三・七夕となる。以上七書の換算値の平均は二・五夕、最高値と最低値を除いた平均も二・六夕で、大差なかった。

右の換算値で目立つのは『真草二行節用集』の〇・八夕で、平均の三分の一にも届かぬほど割安である。本書は、寛文二年に藤井五兵衛が開版したが、寛文五年までには武村三郎兵衛が板本を買取したのであろう。その際、買取価格が極端に安いなどの事情があったものと思われる。あるいは、武村には後継書『増補二行節用集』があるので、現

代風にいえば在庫処分のために安価に設定したのかもしれない。実際、宝永六年改修の目録には立項されるものの、価格は記されておらず、販売中止になったものと思われるのである。ひるがえって『増補二行節用集』が七書中の最高値となるのも興味深い。版元は同じ武村なので、『真草二行節用集』の廉価な分を『増補二行節用集』で補うかのようでもあり、武村は武村でバランスをとったのだろう。であれば、『真草二行節用集』の価格を在庫処分的な扱いと見ても、あながち的外れでもなさそうである。判型が大きいことさえ厭わなければ、収載語数も一〇〇〇語ほどしか違わない⁽⁶⁾。『真草二行節用集』は、良い買い物であったろう。

こうした節用集の価格を、参考までに現代の貨幣価値に置きかえてみよう。このようなとき、米価によることが多いが、江戸時代と現代とでは米価の経済的位置に懸隔があるとも言われる。そこで、便宜、かけそばの価格で比較してみる⁽⁷⁾。ただ、七〜一六文ほどのそばの価格から、数匁する節用集の価格を換算するので、誤差も拡大されることになる。本来なら一〜一〇匁程度のもので、現代でも経済的な位置づけが変わらない商品によるのが理想的ではある。

換算する⁽⁸⁾と元禄当時の一匁は三五七五円となる。右七書中、『大広益節用集』は、規模の上で、当時もつとも普通に開版されたものに近いが、二匁八分では一〇〇〇〇円となる。美濃判・一〇巻の威容をほこる『新刊節用集大全』は十三匁で四六〇〇〇円ほどになる。それぞれ、かなり高い買い物との印象を持つがいかがであろうか。

二 明和・寛政期

以前、米谷隆史氏より橘川俊忠(二〇〇〇)の存在を知らされた。そこに紹介される奥能登時国健太郎家の屏風の下張り文書は、「京の書籍商桜井仲蔵が加賀金沢の書籍商塩屋与惣兵衛にあてて作成した」書籍の通い帳の一部で、

書名などから「明和を上限として寛政を下限とする」時期のものという。早引節用集と在来型の節用集の名が見え、両書の拮抗ぶりが価格に反映されるかどうかも知られそうで、興味深い資料である。同一の書肆間での取引きなので、比較する際の条件が整っている点でも貴重である。

まず、在来型の節用集から示す。重複する記事は割愛し、二部での価格は一部での価格にするなど整理した。

大々節用新板・五匁 ↓『大々節用集万字海』明和五年刊。美濃判・一一六丁。換算値四・三匁

百万節用・五匁五分 ↓『百万節用宝来藏』明和六年刊。美濃判・一一六丁。換算値四・七匁

文翰節用・三匁四分 ↓『文翰節用通宝藏』明和七年刊。美濃判・八九丁。換算値三・八匁

字尽重宝記・二匁八分 ↓『大広益字尽重宝記綱目』天明元年刊。半紙半切・二〇六丁。換算値三・六匁

換算値の平均は四・一匁となり、元禄期の二・五匁からすると一・六倍ほどの上昇である。諸物価の上昇とともに、元禄のが正味の定価ないし卸値であって、この通い帳では送料ほか諸実費が込められているのかもしれない。

さて、在来型の節用集に対して、早引節用集は、一様に割高なのが印象的である。

早引節用・二匁八分 ↓『増補改正／早引節用集』再版数度。三切・一三八丁。換算値六・一匁

早引真字入・五匁二分 ↓『増字百倍／早引節用集』再版数度。半切・一七六丁。換算値五・九匁

早引大節用・七匁二分 ↓『早引大節用集』明和八年刊。美濃判・一三三丁。換算値五・五匁

早引節用集の換算値は平均で五・八匁となり、在来型の一・五倍にもなる。これにはまず、そこまで割高でも購買者がついてくるとの判断があるのだろう。新しい検索法の節用集は、版權(板株)のために専売できるだけでなく、売価の割り増しも可能だったようである。なお、換算値は割高でも、実際の価格は、在来型の節用集からみて払えない額ではなさそうで、そうした微妙な設定ができるのも旨味だったろう。あるいは、在来の節用集が安売りされた可能性も考えられるが、早引節用集開版直前での価格によって比較しなければ正確なところは分からない。

ついで、長友千代治氏の紹介する「下郷千蔵宛風月孫助書簡」（明和八年九月二十七日付、同年十一月二日付）に見える『広益好文節用集』を検討する。下郷千蔵（学海。一七四二―九〇）は尾張鳴海の素封家で俳人。風月孫助は京都・風月荘左衛門の名古屋出店で、千蔵向きの新刊が入荷すると見計らいで送付したようである。なお、次に示す丁数は、米谷隆史氏が、明和八年本（真草二行）とおぼしい首尾の欠けた本につき、安永三年本（行字一行）の体裁から欠落分を類推・補足した数値である。

好文節用・六匁五分 ↓ 『広益好文節用集』明和八年刊。半切・二二〇丁。換算値六・二匁

好文節用・薄用・九匁五分 ↓ 『広益好文節用集』明和八年刊。半切・二二〇丁。換算値九・〇匁

同一の節用集で、料紙の異なるものの価格差が知られるのも興味深いが、まず、通常の料紙の換算値は、早引節用集のそれと同等に割高である。これは、本書が（イロハ↓仮名数の偶数奇数↓意義分類）の順で引く新たな検索法を採るからなのだろうが、ここまで換算値が近いとは驚きである。本書は開版して間もなく、成功するかどうかも不明の段階である。にもかかわらず、早引節用集並みの成功を見込んでか、割高に設定するのが注目されるのである。

ついで、大坂本屋仲間の「出勤帳二番」明和六年六月一日分記事に記された節用集とその価格を見ておく。

連城大節用・五匁 ↓ 『連城大節用集夜光珠』明和六年刊。美濃判・一二五丁。換算値四・〇匁

新撰正字通・三匁□分 ↓ 『新撰正字通』明和六年刊。小本（三切か）・八二丁。換算値二二・八匁

『連城大節用集夜光珠』は、濁音・長音・撥音を示す仮名の有無という基準を検索法にとりいれるが、在来型節用集並みに割安である。これは、この件での買い手が、公儀に準ずる天満組惣会所であるからかもしれない。「御公儀へさし上売候本、直段下直二可仕候事」（「出勤帳二〇番」享和三年四月一四日）と、安値での販売が考えられるからである。しかし、次節でみるように、寺社奉行所からの注文でも割り引かなかった例もあり、判断に迷う。

『連城大節用集夜光珠』の例を除けば、新しい検索法を採る節用集は、価格を割高に設定するとみて良さそうであ

る。あるいは、それらが半切・三切などの小型本でもあるので彫刻・印刷・裁断のために割高になったとも考えられ、であれば、逆に美濃判の『連城大節用集夜光珠』が割安なのも了解できる。が、この例は特殊事情を考慮する余地があり、美濃判の『早引大節用集』も割高なので、やはり検索法による割高設定を優先して考えたい。

割高といえば、『新撰正字通』は相当な額になる。判型・丁数は「割印帳」により、換算値は、「小本」を三切と見、虫損部分を最低の一分として算出している。ところが、本書安永九年再版の二一〇丁との丁数によれば換算値も四・四匁と従来型の節用集らしい値になる。出勤帳の価格か、初版の丁数かに誤りがあるものと思われるので、本書の価格は、残念ながら考察の対象からはずさざるをえない。

さて、ここでも現代の金額で見よう。時国家文書の作成時期に広がりがあるので的確にはいれないが、安永ごろの銀錢相場によって一匁二六八五円としてみる。『大大節用集万字海』『百万節用宝来蔵』は当時最も多く開版された在来型節用集に属するが、一三〇〇〇円から一五〇〇〇円となる。対する早引節用集は、小型の『増補改正』が七五〇〇円、半切の『増字百倍』で一四〇〇〇円ほどとなる。価格上は『増字百倍』が在来型節用集のライバルになるが、体裁上も真草二行表示をとるなど、在来型節用集に合わせた節がある。まさに好敵手として企画・開版されたのであろう。なお、『広益好文節用集』の普通の料紙と薄葉版とは、それぞれ一七五〇〇円・二五五〇〇円となる。薄葉版は、相応に薄くなって携帯性は増すだろうが、この価格では売れ行きはどうであつたらうか。

三 化政期・天保期

化政期については二件しかないのですが、ここに合わせてあつかう。まず、池田真由美氏（市川市立歴史博物館）によると上総国葛飾郡鬼越村の名主・五兵衛が記録した「有物帳」の文化七年分に、早引節用集二冊で五匁とする記載が

あるという(二〇〇二年五月二三日電話)。価格から『増補改正／早引節用集』かと思われる。また、岸雅宏氏の紹介する『東壁堂蔵版目録』は、名古屋の書肆・東壁堂の文政五年における蔵版書目で、巻頭に「金売正味定価」とあるように販売定価を併記するものである。節用集は「書札節用」一点があった。

早引節用集・二匁五分 ↓ 『増補改正／早引節用集』再版数度。三切・一三八丁。換算値六・二匁
書札節用・三匁八分 ↓ 『書札節用要字海』寛政九年刊。半切・一六九丁。換算値四・五匁
『早引節用集』はやはり割高である。「書札節用要字海」は横本ながら、上段に書翰文例を、下段に節用集を配する工夫があるけれども、検索法は従来型のイロハ・意義分類なので割安に設定されているのであろう。

天保期に移る。高橋敏氏は、上野国勢多郡原之郷村の名主・船津伝次兵衛(三代・四代)の記録した「家財歳時記」より、購入書籍と価格の一覧表を作成している。そのなかに節用集が二書ある(天保八年七月、同一〇年冬分)。「合類節用」には、再版回数・時期等を考慮し、外題を「増補合類大節用集」とする「書言字考節用集」を比定した。なお、この一覧には「古物」と注されるものもあるが、この二書には注記がないので新本での購入なのであろう。

合類節用・二九匁 ↓ 『和漢音釈書言字考節用集』明和三年版。半紙判・五二〇丁。換算値七・四匁
大全正字通・九匁五分 ↓ 『大成正字通』享和二年刊。三切・三九八丁。換算値七・二匁

両書とも割高である。これは、上方書肆の開版書なので上野までの送料が込められた価格なのかもしれない。別に『書言字考節用集』の場合、全二三巻の各巻ごとにつく厚手の表紙の経費のほか、学術性の高さが買われていたのが割高に設定しやすかったかもしれない。一方、『大成正字通』は、検索法に濁音仮名の有無を採り入れたり、各字の平仄や語の四季別を表示するなどの付加価値も注意される。このように割高になる理由はいくつか考えられるが、価格設定のシステムを把握しきれずおらず、もつとも効いている事項を指摘できないのは残念である。

刈谷藩医・村上忠順(一八二二〜一八四)の購買目録『宝貨記』から早引節用集の例を引いておく(天保二二年六月、

同一四年六月)。いま、築瀬一雄氏の翻刻によれば、次の二書の購入が知られている。

新早引節用真字附 正五匁三分 ↓ 『増字百倍／早引節用集』再版数度。半切・一七一丁。換算値六・二匁
" (新) 早引大全 " (正) 八匁八分 ↓ 『大全早引節用集』再版数度。半切・三四一丁。換算値五・二匁

従来型の節用集の価格が分からないので確実ではないが、『増字百倍』の換算値が化政期の『増補改正』と変わらないので、やはり割高なのだろう。一方、二倍の規模の『大全早引節用集』が若干割安なのは妥当かと思われる。

ところで『大全早引節用集』の「八匁八分」との価格は興味深い。同時期の大坂本屋仲間の「出勤帳五十二番」天保一二年五月一日分に「一東寺社御役所より、大全早引、御注文に付差出し候事、代八匁八分」と、まったく同じ価格が記されるからである。これは、『宝貨記』に「正」字が冠されるように正味定価とみられるので、大坂東寺社奉行所には定価のまま販売したのであろう。前節に紹介した「御公儀へさし上売候本、直段下直ニ可仕候事」との記述に反する例ともなる。一方、村上忠順が購入する場合は、ほかに送料などの実費が加えられるのであろう。

ここで、現代の貨幣価値に置きなおしてみよう。割高とした『書言字考節用集』の二九匁は六九〇〇〇円、『大全正字通』の九匁五分は二二五〇〇円ほどとなる。また、早引節用集については、前節と同じものが二種あるので比較すると、名目上の値付けはどうあれ、いくぶんか安価になっている。

『増補改正／早引節用集』 二・八匁 (七五〇〇円) ↓ 二・五匁 (五九〇〇円)
『増字百倍／早引節用集』 五・二匁 (一四〇〇〇円) ↓ 五・三匁 (一二六〇〇円)

もちろん、この二例のみから早引節用集が安値になりつつある、などとは言い切れないが、編集しなおすなど新たな経費負担が発生しなかり、ありうる方向ではある。

おわりに

幕末期については、政情の不安定から価格の急騰などが考えられ、かつ、集まった資料⁽¹⁰⁾に作成時期の明確でないものもあり、正確な換算が困難なので割愛する。この時期をのぞけば、ともかくも通覧でき、近世節用集の価格のアウトラインを描けたかと思う。また、早引節用集など検索法に工夫のあるものが割高傾向にあることが知られたのも幸いであった。一八世紀後半における検索法開発の過熱化の要因を、経済面では版權(板株)取得による専売だけを考えていたが、今後は、価格設定にも注目すべきものようである。ところで、こうした価格の質的な面におよびたのは、美濃版・一〇〇丁あたりの換算値によるのであり、他に『新撰正字通』の過度な割高を指摘するなどの効用もみせたのであった。はなはだ単純な計算によるものだったが、望外の働きをしたように思う。

こう記せば相応に収穫があったことになるが、今後の課題の多さに圧倒されそうである。より一層の資料収集を心がけることがまずあるけれども、他に、思いつくままに記しても、以下のようである。

まず、前節の最後にみたように、同一節用集の価格の変遷にも興味があるし、通覧を意図するとき、まずしなければならぬことでもあろう。また、比較対象を横に広げて同一節用集の同一時期での価格の地方差も知りたく思う。

ついで、予想外に効用を発揮した換算値だが、より精度を高める必要があろう。ことに技術料をどれだけ反映できるかが課題である。あるいは、総語数を考慮すると便宜的には精度を高められようか。丁数の割りに収載語数が多いれば、その分、彫刻・印刷の技術が必要で、経費が割高になろうから。ただ、丁数も少なくなるわけで、技術料分は相殺されるかもしれない。たとえば、元禄期の『大広益節用集』は、頭書を二段とし、上段に『増補和玉篇』を配するなど、同時期の七書中、版面密度がもっとも高いが、換算値は平均程度になっている。また、換算といえば、現代

の貨幣価値に置きかえて参考に供したりもしてみたが、よりの確で実感の得やすい手段を探したく思う。

一方では、価格を構成する諸側面にも考察をおよぼしたい。まず第一に、開版経費について、その総額や細部の内訳、新版と再版での異なりなどを知りたく思う。幸い、節用集については宗政五十緒(一九八一)に『万代節用字林蔵』ほか四書を含む経費の一覧があり、節用集以外の辞書・実用書まで手を広げれば他にも報告があるので、相応の検討ができそうである。第二に知りたいのは流通過程での経費である。送料などの実費もさることながら、仕入れ値と売価との関係も知りたい。この点、『飛騨国』高山町諸色値段取調帳(嘉永六年)に「書物屋の儀、何本を仕入候と申定無之、尤是迄仕入直段より式割懸ケニ売捌来候」とする例を得ているが、高山だけのものか、他の地でも同様なかなど、妥当な線だけでも知りたいところである。

主なところでもこれだけの課題があり、何から手をつけるべきか、迷いもある。が、優先順位をつけるほどには資料に恵まれているわけではなく、節用集の価格にまつわることであれば何でも収集したい⁽¹¹⁾というのが正直なところである。御教示方を切にお願いする次第である。

注(1) 時枝誠記『国語学原論 統篇』(岩波書店 一九五五)、安田章『中世辞書論考』(清文堂 一九八三)等。

(2) 「絵馬ヤ」が津田か山本の屋号かどうか不明だが、書名中の「綱目」と冊数の一致により同定した。

(3) 中本並みの大きさとする向きもあるが、誤りであろう。なお、以下で示す丁数は、佐藤が数えたものもあれば、先学の論考によるもの、現存書が見がたい場合は江戸本屋仲間の「割印帳」(朝倉・大和編『江戸出版書目』(臨川書店 一九九三))にしたがったものもある。

(4) 一、四巻は米谷隆史氏蔵本に、五、七巻は亀田文庫本による。米谷氏には氏蔵本調査の人数をおかけした。

(5) 狩野文庫蔵寛文二年本の刊記に「藤井五兵衛重刊行」とあるが、寛文二年以前にも開版されたものか。

(6) 高梨信博「近世節用集の一展開」(『国文学研究』一一三 一九九七)が「各節用集の項目数」として示した、「真草二行節用集」の「約一九二八七」と「増補二行節用集」の「約二〇四四一」にしたがう。

- (7) 歌野博(一九九三)のアイデアである。安価で簡便な食事としての位置は変わりなく、妥当な選択でもあろう。同氏は文化年間の一文を二二―二五円とするが、やはり米価ではなく多くの日常食品等によった高橋克彦『北斎殺人事件』(講談社 一九八六)も同時期の一文を二五円と見るので、相応の確からしさがあるものと思われる。
- (8) かけそばの価格は植原路郎『蕎麦辞典』(東京堂出版 一九九六)により、現代の価格は四五〇円とする。銭・銀の交換比は地方史研究協議会編『新版地方史研究必携』(岩波書店 一九八五)による。

本稿の節	そばの価格	銭一文の値	銀一匁の値	銀銭交換比の算出期間
元禄期	七文	六四円	七一・五文〓三五七五円	元禄四―一三年の平均
明和・寛政期	一二文	三八円	八九・五文〓二六八五円	明和八―安永九年の平均
化政期	一四文	三二円	一〇二・六文〓三二九八円	天明元―寛政二年の平均
天保期	一六文	二八円	一〇七・〇文〓三五四四円	文化八―文政三年の平均
	一六文	二八円	一〇八・〇文〓三三六四円	天保二―嘉永三年の平均

(9) 本屋仲間の記録類には売価の記事はまずない。意外ではあるが、書肆同士の結び付けるのが本屋仲間であって、その方面の記録はしても、一冊一冊の書籍の価格は原則として個々の書肆の問題だからであろう。

(10) 幕末・明治初期の価格を紹介したものに、八木敬一「江戸の辞書さまさま」(『言語』一九八四―一三)。「江戸大節用海内蔵」(金二両二朱)、横山俊夫「日用百科型節用集の使用態様の計量化分析法について」(『人文学報』一九九〇)。「永代節用無尽蔵」(一両ほど)、「江戸大節用海内蔵」(一円七〇銭)などがある。また、書誌研究会編『書林蔵版書目集』(ゆまに書房 一九八四)収載の「尚古堂発兌書目」(文久三年改正)に「江戸大節用海内蔵 六十五」(六五匁か)、同じく「柳原蔵板」(刊年不明。巻末に「河内屋清七記」の墨書)に「早引大節用集 四十」(口は不明)などがある。なお、八木は、他に、「二条家御用商人職人直段書上書」(元文二年成)に「二匁三分 節用集 壱冊 本屋平次郎」とあるを紹介するが、現存書に同定できないので採り上げなかった。二条舎子入内時の文書とこのことなので、あるいは「女節用集墨葉家宝大成」などかとも思われるが、確実ではない。なお、元文当時の二匁三分は九〇〇円ほどと換算される。

(11) 購買者が売り払う際の価格も参考となるかもしれない。長友千代治氏の紹介する河内柏原三田家「旧蔵書籍目録」(享保二年写)では「万華節用集」「立新節用集」「万年節用集」が各八分で引き取られたという。それぞれ「万花節用字林大成」(享保六年刊)・「立新節用和国宝蔵」(正徳三年刊)・「万年節用集大成」(宝永七年ころ刊)とすれば、

当時、もっとも多く開版されたタイプのもので、新本で三匁前後かと思われる。売り払い価格から新本価格が逆算できるとなれば、相応に利用価値はあることになる。

【参考文献】

歌野 博(一九九三)「江戸時代の本の値段考」『日本古書通信』七二―
 岸 雅宏(一九八五)「翻刻『東壁堂蔵版目録 全』」『名古屋博物館研究紀要』八
 橘川 俊忠(二〇〇〇)「近世能登・加賀に流通した書籍」『歴史と民俗』一六
 岐 卓 貴裕(一九七二)「岐阜県史 史料篇 近世七」大衆書房
 佐藤 貴裕(一九九〇)「早引節用集の流布について」『国語語彙史の研究』一一
 (一九九〇)「近世後期節用集における引様の多様化について」『国語学』一六〇
 (一九九四)「早引節用集の位置づけをめぐる諸問題」『岐阜大学国語国文学』二二
 (二〇〇二)「子どもと節用集」『国語語彙史の研究』二二
 斯道文庫編(一九六三)『江戸時代書林出版書籍目録集成』井上書房
 高橋 敏(一九九〇)『近世村落生活文化史序説』未来社
 長友千代治(一九八七)『近世の読書』青裳堂
 野間 光辰(一九五八)「浮世草子の読者層」『文学』二六一―五
 宗政五十緒(一九八二)「書肆 吉野屋仁兵衛」『龍谷大学論集』四一―八
 築瀬 一雄(一九八二)『本居宣長とその門流』和泉書院
 山田忠雄編(一九六一)『開版節用集分類目録』

【補注】

二〇〇二年九月に『広益好文節用集』明和八年版を入手された米谷隆史氏より、同書丁数につき墨付き二〇九丁との教示を得た。これにより簿葉刷りの換算値は九・一匁となる。米谷氏には、記して謝意を表す。